

〈研究会発表要旨〉

作品を読む

—「羅生門」を中心に—

工 藤 茂 (文学部教授)

文学の研究は読むことに始まり、読むことに終わると言われている。私どもが作品を読んでいく場合に注意すべきことは、その作品がどのような特色を持っているかということ捉えることのできる読み方をしなければならないということである。そのために次のような観点から作品を読んでいく。

- 1 時間、2 空間、3 登場人物、
- 4 人間関係、5 語り手、視点、
- 6 文体、イメージ、7 構造。

例えば、芥川龍之介の「羅生門」を読む場合、以下のような読み方をしていく。

その第一は、題名がどのようなイメージを私どもにいだかせるかということ。そこから検討を加えていく。羅生門は平安京の南の人里離れた場所に聳えていた大きな城門であった。この門のイメージを描くためには、池田亀鑑の『平安朝の生活と文学』、島津久基『羅生門の鬼』が参考になる。芥川の時代、羅生門のイメージはおそらく謡曲「羅生門」と、明治27～29年刊行の『日本昔噺』（博文館）の第15編『羅生門』に負うところが大きかっただろう。頼光の四天王の随一渡辺の源次綱が、羅生門に鬼が住むと聞いてそれを確かめに出掛けた。すると何者かが兜のしころを掴んだ。太刀を抜いて切るとそれは鬼の腕であった。後に鬼は伯母に化けて腕を取り返しに来たというのがその内容である。つまり、羅生門は鬼の住んでいる不気味な空間であり、死人を放置し、夜になると人の近

づかない畏怖すべき空間のイメージを読者に与えるものであった。従って平岡敏夫氏の言うように、この小説を構成する異空間への入り口としての役割を果たす門であった。ただ、そのイメージがあまりにも強いために、この小説の真の特色とテーマを覆い隠してしまう危険性を孕むものでもあった。

登場人物は下人と老婆の二人であるが、ノートによると初め下人には「交野の平六」「交野平六」「交野五郎」等の名前がつけられていた。この名前をみる限り、登場人物は少々滑稽な人物として設定されていたのではないかと考えられる。そこで作中の下人の行動と心理の動きを追って行くと、以下のようなことが見えてくる。それは下人の正義感のいい加減さ、それを通して描かれる人間の心のいい加減さである。

下人の心は、「悪に対する反感」「悪を憎む心」から、「或る仕事をして、それが円満に成就した時の、安らかな得意と満足」へと、自己を軸にしながら回転し、いったんは「冷な侮蔑」をともなった「前の憎悪」へと戻りながら、最後には生きるためには何でもする「勇氣」へと、これも自己を軸にしながら到達する。このように、どのような時にも己を離れることのできない人間のヲコ。これを下人を通して描いたものが小説「羅生門」だったのである。ということ、を、「作品を読む」ということの人間関係および登場人物という二つの観点から読み取ってみようとして試みてみた。